

# MARUBI

富士吉田市歴史民俗博物館だより

22

2004.3.31

FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY NEWS



MARUBI

## 富士吉田あれこれ

前号(21)では富士山には表と裏の認識があるということを紹介しました。今回も富士山に関する認識のひとつについて触れてみたいと思います。

当館に送られてくる郵便物やメールなどのあて先をみると山梨県ではなく、まれに静岡県富士吉田市と書かれたものを目にするがあります。住所の記載間違いや誤認は全国的にあることと思いましたが、気になって事例を見聞きしたところ、吉田ではこのような記載間違いの住所が結構多いことがわかりました。郵便番号が正確であれば記載間違いでも届くことと思いますが、郵便番号の記入漏れなどがあると、照合に時間がかかるためか遅れて到着するものもあつたようです。静岡県富士吉田市と書かれていたために送られてきた3カン箱が、あ

## 静岡県富士吉田市？

て先不明であちこち回されたために送り先に届いたときには中のミカンが半分腐っていたなどという話も聞きました。

この無意識的に記載された住所間違いの理由のひとつに「富士」ということばが冠された地域の誤認によるものではないか、と考えることができます。当館への問い合わせのなかには富士山という山名の由来、つまり何で「富士」という名がついたのかという質問が多く寄せられます。富士山の呼称に関わる古いものでは「常陸国風土記」筑波郡の条にある「福慈」や「万葉集」巻三、山部赤人の歌に「不尽の高嶺に...」というくだりがあり、古代から「フジ」という呼称があったことがわかります。また、都と東国を結ぶ古代からの主要な街道であった東海道から見ると、富士山は、人の往来や物流におい

て常に目に入る大きな存在でした。実際のところ「富士」の語源は定かではありませんが、多くの史書では、その山が駿河国富士郡にある御山であることから、富士山という呼称が付いたのではないかと考えられてきました。

「裾野より.....富士の山、甲斐で見ると駿河が良い」などという慣用語?も使われるほど、富士山=駿河なる富士、つまり静岡にある山としてのイメージが広く一般に定着しているように感じられます。このようなイメージから当富士吉田市も富士という名称が付くために静岡県の行政区の一つではないかと無意識的に誤認されてしまうようです。そして、このことはインターネット上のweb検索でも顕著にみることができ、**「静岡県富士吉田」**で検索してみると、この記載間違いが意外な

ほど多くヒットすることを目的の当たりにします。一方、近隣の河口湖や山中湖などではこうした間違いがほとんどみられません。どうやら観光地・景勝地としての富士五湖は山梨県としての明確な認識があるようです。しかし、これを「富士吉田」と限定すると静岡県富士市、富士宮市に引っぱられるかたちになり、加えて、大井川沿いに展開し東名高速道路のインターチェンジもある「吉田町」の存在も影響し「静岡県富士吉田」となってしまうようです。

web上では静岡県の飛び地?として存在することもある富士吉田市ですが、静岡・山梨のいずれにしても富士山はひとつの山であり、富士山を取り巻く周辺域の一体性の表れてはいないかと解釈したいものです...

<布施光敏>

## はじめに

今回は吉田の火祭について報告しましたが、今回は、これに類似する祭りとして、山中湖村山中の諏訪明神安産祭と忍野村忍草の本祭をとり

## 山中諏訪明神安産祭

吉田の火祭に関連する祭りに、山中湖村山中の安産祭、忍野村忍草の諏訪神社秋祭があります。山中諏訪明神の祭りは、山中のお祭り、オミヨウジンサンのお祭り、梨祭などもよばれます。

山中湖村山中の諏訪神社は、通常諏訪明神と称され、正式には同地の浅間神社の摂社であり、安産の神として信仰されています。同社がこの地に鎮座してから、山中の村人の中ではお産で死ぬものは1人もいなくなったといわれ、そのためか婦人の参詣が多いのが特徴です。

神社は江戸時代、宮本左近名の法印が管掌する神祠だったようです。例祭は湖の対岸にある平野地区の明神山に祀られる明神・奥宮・や湖の主

あけて比較してみることにします。吉田の火祭とこれらの祭りとの共通性を抽出することができれば、吉田の火祭についてさらに深く認識できるのではないかと考えます。

とされる産神の信仰とも結びついていきます。現在の奥宮をまつる前の奥宮(元宮)は県境を越えた静岡県小山町の地に存在します。

古くは、諏訪神社の神輿を妻籠で作って担ぎ、後から大鎌を持った人々が従ったものとされます。神輿のルートは現在の駐在所脇から四辻を経て、大橋の木のところへ出ました。この木を御神木といって3回廻り、それより200mほど進むと堀に出ます。さらに50mくらい行くところの古木の古木が2本ありました。ここがかつての御旅所で、神輿は一夜ここに留まりました。翌日は午後には還御となり、堀まで来たときに昇天行事といって、堀の中で神輿を焼却させたのでした。これよりこの堀を諏訪の堀と称するようになったと村に残る記録にみられます。祭礼は、旧暦では7月25日に



諏訪明神の神輿



明神峠付近の元宮



明神山の奥宮

執行されました。

祭りは奥宮祭と例祭からなっており、例祭は宵祭と本日の2日間行事が行われます。9月4日の宵祭は奥社・奥宮から豊玉姫命が産神に護られて湖を渡ってくる日だといわれています。

午後4時になると山中小学校の5・6年生が諏訪神社に集合し、神職の袂をうけて、2基の子供神輿を担ぎ出します。男子は富士山型の、女子は幣束型の神輿で5時前に出発します。5時には神事が始まり、約1時間をかけて行います。6時に御霊移しの儀式をし、祝詞の奏上を行います。ここでは、お神楽(獅子舞)が舞われ

ない」と神輿は発興できない、といわれます。

お神楽は「下がり葉」、「幣の舞」、「狂い」が舞われます。獅子は女獅子で、明見から習ったものだとしていいます。昔は赤いジロウ襦袢を着て舞いました。ブク(忌服)のものは舞えないので、平成9年には別のものが代役で舞いました。神輿は氏が年送りで担ぐ明神神輿と青年(青年団)が担ぐ幣束型のものがあります。平成9年の担ぎ番の組は、丸尾二組、諏訪組、二之橋二組の三組でした。担ぎ番の家が59軒あり、その中の19軒がブクのため、祭りに参加することができませんでした。

神輿が発御し、7時には旧道の浅間神社入口の大浜道の分岐点まで進みます。そこでは青年がヨイヨイで跳ねており、「青年は忍草の馬と同じで空威勢はっかだ」とか、「青年、何よしてらだあ」とか、「幣束に揺られちゃった」とのおしゃべりがなされます。その先のテマゴヤ(手間小屋)の前を神輿が一気に走り抜けます。明神神輿が走るときには「青年も走れ」といって、幣束が後に続いて走ります。

ウジョウ、ロッコシウウジョウ」と被いの言葉を唱えながら走り抜けます。

宿の中ほどに湊屋という屋号の家があります。この家では通りに面した一番奥の部屋に子どもを抱いた女性の人形を飾っています。この人形は豊玉姫命と伝えられ、祭りの参加者は安産の祈願をします。祭りに参加する新生児の母親はタビハダシ(足袋裸足)で参詣し、この人形にも願を掛けます。

祭りの要所要所では太鼓が打たれます。太鼓には「馬鹿囃子」と「七五三」があります。神輿の誘導には馬鹿囃子、還幸にあたって御神歌を唱える前には必ず七五三の太鼓が打たれ



ブクの人が集った小学校の体育館

手間小屋はかつての寺・観音堂の跡とされ、忌服のかかった人に覆泊まりをさせる施設であり、後に隣接する小学校の講堂や体育館が使用されました。ブクのかかった人たちは、この日の昼頃までには手間小屋に入り、そこに手間見舞を届けられました。現在では村外の親戚のところに旅行に行ったりするようになっています。ブクは親が1年、兄弟が90日、父方の叔父・叔母が60日、母方の叔父・叔母が30日、従兄弟7日で、葬式を「見ても三日のケガレ」とされています。神輿の担ぎ手たちは、テマで入っているものや纏れたものをみないように、手間小屋の入口の天王社と地藏の区間を「ロッコシウ



明神神輿の渡御



幣束の渡御

ます。公民館の入口まで進むと神輿と幣束を合わせ、「ヨッサア、ヨッサア」の掛け声を掛けます。この場所はかつての関所・番所の跡で、宿が「ハ」の字形になっており、その結節部に口留番所があったとされています。この場所の道下には開元屋、道の上には穀屋という宿屋がありました。また、道の両側には矢来が組まれていたといわれ、矢来浜の地名はその名残です。ここまでくると明神さんは後戻りすることができないといえます。さらに進むと、最終的には三日月屋前の三叉路まで行って戻ってきます。旧来はこの関所跡が宿屋であり、ここから四辻からその当時のオタマヤ(御霊



湊屋の神像

屋、御旅所のこと)に入りました。また、神輿がなかなか御霊屋に到着しないので、昔は稚児が2人で神輿のお迎えに出たものでした。「オムキヤーに出るや」と通りを触れ回りました。



神輿の先導

10時20分に神輿が到着し、それを合図に御霊屋前のかがり火を灯します。御霊屋の前にある家がオツキ（御着き・到着）の奉仕をしました。この家は太鼓免の坂本イトウの分家にあたる家です。その家には古い白があり、まず白の上に神輿を載せて正面を奥宮の方へ向けて休み、その後白の周りを3周回ります。御霊屋の傍らには柏の巨木があって、以前はその周りを回っていたともいわれています。その後、神輿は「前を向いたまま入れる」といって、参拝者に背を向けて御霊屋に納めました。御旅所到着後は5回の御飯を上げる神事が執り行われました。最初は到着後の「オツキのオコフ」といって赤飯で、2回目は深夜、丑の刻に「夜食の蕎麦」を上げます。翌朝になると塩味のホ



御霊屋前の松明

タモチを5個お供えし、昼食にはアズキメシ（小豆飯）夕方の還幸前には「御立ちのシラメシ」という白米飯を供えます。

現在はおりませんが、かつては一晩中かがり火を焚いて神輿のおこもりをしたといえます。それは太鼓免の家の仕事であったようです。

昔は御霊屋の建物はなく、柏の木の傍らに消防のポンプ小屋があり、



明神神輿の御霊屋への到着

神輿の担ぎ棒を納めるために奥壁に2ヶ所の穴をあけ、神輿が具合よく納まるようにしてありました。そこで丑の刻、丑三時、夜中の2時頃に御神歌を上げました。その時間になると妊産婦が三々五々集まってきて、太鼓を七五三にたたいて御神歌をあげました。

「すわのみや みかげ やりゅうが いにも さりゆがいに もげにももろもそろ」というもので、「げにももろ、もそろ」の時に神輿に取り付いてユウラク（環路）を揺らしました。この御神歌は3回上げられるものでした。

祭りの本日は9月5日です。この日、御霊屋の神楽殿では明神太鼓の奉納、青年・小学生・中学生の屋台行列や踊りの行進などが行われます。夕

には神輿の発興祭が執り行われ、還幸の途につきます。前日と同じ神幸の道を戻り、神輿は諏訪神社へと帰っていき、午後11時過ぎに神社の本殿前に到着します。ここで太鼓が七五三に打ち鳴らされ、神輿に付く行列が整えられます。この時には担ぎ番の家の男ばかりではなく、出産後の赤ん坊を背負ったものやこれから出産を間近に控えた妊婦などがその後に取り付いてひとつながりとなります。「神輿を担ぎに来た。」「うん、担ぎに来た。」などの妊産婦の会話が交わされ、神輿の後ろについたものも「神輿を担いだ」とみなされ、実際に前で神輿を担いでいる男たちと一体として扱われます。これらの若い女性たちはすべて履物を脱いで夕ノハダシの状態となります。



御霊屋前での祈願



御霊屋へのお礼参り



御霊屋でのお神楽の奉納



神社前での太鼓叩き

## 『山中安産祭・忍草本祭』



神輿の神木廻り

準備が整うと御神歌を歌いながら、巡り木・御神木を3回廻ります。御神歌の「モーソロ、モーソロ」の歌詞の部分ではそれに合わせて後ずさり、臨月に近い妊婦や乳飲子を背負った女などもみくちやにされながらも何かに憑かれたような興奮状態で必死に回るさまは壮観です。その後、拝殿前に神輿を移し、さらにひとしきり「ヨイヨイ、ヨイヨイ」の掛け声とともに神輿を激しく揺みます。それが治まると、本殿への遷座祭が行

われます。神輿の担ぎ手は諏訪神社の前浜まで走って浜降りを行います。かつては実際に浜に降りて手足を洗ったものですが、現在は湖畔の道路端で湖に向かって一礼をして帰ってくる人もいます。

9月6日は後祭となり、子どもの奉納相撲、稚児行列が行われ、一連の祭行事が終了します。

火祭の御神歌の「やいよう神、さいそう神」の部分は、安産祭では「やりゅうがいにちも、さりゅうがいにちも」となり、それに続けて、「げにもそ

ろ、もそろ」と唱和されています。第二次大戦前の御神歌は、

「すわのみや みこし やりゅうがいにちも うりゅうがいにちも げにもうそろ もうそろ」と歌っていたといわれます。安産の神としての諏訪明神(豊玉姫命)の神輿が、やりゅう(左腰)とうりゅう(右腰)を従えて進む様子を表現しているのだといい、げにもうそろは「もうそろそる産まれるころだ」とし、

後ずさりすることを出産の際の陣痛を表しているとの説明されています。これとは別に『山中湖村史』の「祭礼」の部分には、

「すわのみや みかげ やりゅうがいにちも さしゅうがいにちも うりゅうがいにちも もうそろ」というものが掲げられます。安産祭を意図して、深長な表現をとっており、神輿の担ぎ手が酒の勢いに任せて、この文句を唱えながら祭りに供奉していたことが推定されます。



神輿担ぎ手の浜下り



安産・成長祈願の神木廻り



神輿遷御後のお百度踏み



境内社諏訪神社

## 忍草諏訪神社本祭

忍草浅間神社の境内には諏訪神社が祀られています。忍草の春祭である浅間神社初申祭に対して、秋祭りは本祭であって、諏訪神社の例祭として9月19・20日に行われます。この祭りは安産のご利益があるとされています。『甲斐国志』71巻には、忍草村浅間明神の末社として「諏方明神、例祭八七月廿日」とあり、別当は東門寺と記されています。神社に専門の神職がいなかったことから、吉田御師が神職を兼帯して祭事を管掌してきたと伝えられます。

祭りの先導を務める太鼓の叩き手を太鼓長といひ、代々長田家が担当してきました。そして、7年ほど前

には頼まれて山中の安産祭の太鼓を叩いたことも聞かれました。例年、宵祭の19日には、神輿を先導して社前で三舞から五舞のお神楽（獅子舞）が舞われ、午後7時頃に神籠橋で三舞、10時頃に横町で五舞、日付が変わって20日の2時頃にオタマヤ（御霊屋・「御旅玉殿」）に到着して三舞をすることを目安としています。舞は「幕の舞」、「幣の舞（歌が入る）」、「刺



浅間神社境内の碓石



本祭の神事



神輿の発興

前厄となる「弓男」の家などに立ち寄って、その場で「モース、モース」（モーソロ、モーソロ）と神輿を肩からはずし担ぎ棒を手で支えながら神輿を揺らし、酒食の接待を受けます。次には、午前0時頃に横町の役員宅で接待を受け、横町組の最後のもの1軒に立ち寄りませす。

御霊屋は神輿が横町の通り、江戸道（ファナック通り）から県道に右折してしばらく進んだところにあります。この県道の区間、神輿の前棒を担ぐ若い衆と背後を担ぐ祭司との間で、神輿を戻そうとする若い衆と御霊屋へ押し込めようとする祭司が揉み合いとなります。神輿の担ぎ棒を「上げれば負ける」などと騒ぎつつ、祭司頭が担ぎ棒の先端を力いっぱい押しながら神輿を進めていきます。神輿が御霊屋に到着し、そこに納めるときに、「こっち（東）を向けて仕舞えばいいはず」などといひながら神輿を反転させて屋内に入れます。この時の時刻は、おお



モーソロ場所でのモーソロ

平成14年の宵祭は、神輿の出発が遅れてその後の予定がずれこみました。神籠橋（6組）で最初のお神楽と神事を行います。午後10時に休憩を終えて、次に神事を行う場所である横町に向けて出発し、「ヨイヨイ、ヨイヨイ」の掛け声で行きます。横町組の提灯の下で、江戸屋前の辻でのお神楽と並行して神事が執り行われます。そして、少しずつ御霊屋に近づいていきます。巡幸の途中、11時に祭りの役員宅、11時半に次回の厄払いに弓を射る

## 『山中安産祭・忍草本祭』

むね午前1時になります。御霊屋での神事と手前の4本の木に注連縄を張りめぐらせた中でのお神楽が同時進行で執り行われます。そのため、下方の囃子に祝詞が重なって聞こえます。先に神事が終了し、続いて2時前にお神楽が終わると、氏子総代、各種団体、区長、組長で「諏訪の宮...」の御歌を大声で唱和し、神輿の担ぎ手が揺え置いた神輿を担いだり肩からはずしたりしながら



御霊屋での御歌あげ



神輿の運幸

本日の祭りには、神輿の出発前の午後1時半頃にお神楽を三舞、午後4時頃に青年会館前で五舞、6時頃に東円寺前で三舞し、そこで住職による読経がなされます。午後8時頃になると、再び神社前に戻ってきて三舞を行います。

かつて、氏子の家々の塙を壊したり窓ガラスを割ったりしながら、村中を擧れまわったものだと言われる神輿は夕方に運幸します。お宮橋を渡って、神社境内に黒道に向かって立てある謡石の前に到着すると、供奉の人々はここで御歌を唱和して、女性はここから神輿にさわることでできます。マワリド(廻り戸)とよばれる神域を3周して、神輿が神社へ入ってきます。

御歌として、

「諏訪の宮 御影 サソーガニ ヤヨウガイニ ゲニモース モース」  
あるいは

「諏訪の宮 御影 ヤーリョウガイ サーリョウガイ ゲニモース モース」(『富士北麓・忍野の民話と民謡』)が唱えられます。御歌は安産祈願の歌と認識されていて、五七七七の和歌調に近いものになっていますが、明らかに山中明神安産祭の御神歌を基礎にしていることがわかります。このことから2つの祭りのご利益をともに安産とすることも関係しているものと考えられます。

忍草に隣接する同村内野には、浅間神社の春祭に忍草に類似する御歌が奉納されています。4月14日の宵祭、神輿が天狗社の御霊屋へ神幸します。15日午前0時、御歌あげとい

って、次の歌を三、五、七回のみづれかの回数を歌い上げます。

「花咲くや 蜂にひるめの おわすところ 御影さす かけ」(前書)木花開耶姫命のいらっしゃるところ、山の峰に日の女神、太陽の光が射している、と浅間神社をたたえる内容を取っています。15日は本祭で、神輿は運幸します。神輿が浅間神社の鳥居のところより、社前の回り木(神木)を3回廻るまで、何回でも歌い上げます。直接、諏訪神社の御歌とは繋がりませんが、御歌あげをして回り木を廻る祭りの形態は、明らかに諏訪の祭祀を意識した祭りとなっています。諏訪神社ばかりではなく、浅間神社などの別の祭神を祀る神社でもこのような形態の祭りがなされている可能性が考えられます。



本祭に飾るススキ

### おわりに

吉田の火祭では、神輿の運幸に氏子がススキをもって神社に参集しますが、忍草の祭りに供えられるススキのように、本来は山から迎えて火祭に飾ってから、神社へと奉納したと考えるとよいでしょう。このように火祭をはじめとする秋の祭りの共通性は少なからず認めることができます。

< 堀内真 >



御霊屋でのお神楽奉納



東円寺での法衆



## 博物館からのお知らせ

### 平成15年度寄託・寄贈資料

平成15年度に博物館へ寄託・寄贈していただいた資料を紹介いたします。ご協力ありがとうございました。

#### 寄託資料

弁天神社 御神刀

#### 寄贈資料

・岩佐善之助	書籍、他	・丹羽幸司	火災写真
・小佐野仰助	書類	・堀内康司	衣類
・宮下淳一	衣類	・渡辺篤一	消防組旗
・加々美鶴吉	ハヤリ、アカナベ	・渡辺精司	機道具、他
・勝保源一	染色道具	・渡辺千雄	機道具、他
・勝保千勝	掛軸、他	・渡辺信行	絵図
・田辺四郎	絵図、お札、他	・渡辺新治	書類
・中沢勇一郎	書籍	・縄田和男	ノコギリ

[敬称略]

現在、博物館では手機に関わる資料を積極的に収集しています。お宅に眠っている古い手機の資料がありましたらご寄贈ください。ご協力をお願いします。

### 刊行図書

企画展図録「富嶽寫眞 写された幕末・明治の富士山」

幕末・明治期に写された各地域の古写真 おもに彩色写真 を集成しました。これらの写真をもとに過ぎ去った富士山周辺域の環境、生活、風俗などを読み解き、現在の様子と比較しました。

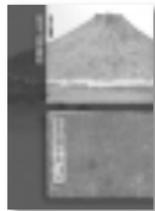
平成15年12月発行 A4版 63頁  
価格1,000円



### 富士山叢書「富士山周遊図」

富士山叢書「富士八海をめぐる」と一体となる地図が本書です。「富士八海をめぐる」のなかで、細切れの図で個別に紹介していた信仰上のポイントを現行の国土地理院1/5万の地図を組み合わせて1枚にまとめたものです。また、裏面は昭和初期に刊行された「富士山近傍図」に対応するものを掲載しました。

平成16年3月発行 A4 B1 版 価格500円



### MARUBI 編集後記

進ること今から十数年前、調査に参加するため、この地へ訪れたのが富士吉田を知るきっかけでした。当時、富士吉田という地名を聞いたときに漠然と「静岡県か？」と思いい込んでしまいました。そして現地へのアクセスを調べるために地図を開いたところ「山梨県」であることが判明。知りませんでした…。本当に…。

そんな無知な私でも富士五湖が山梨県であるという認識は持っていました。それでも、

河口湖や山中湖等には幾度も遊びに来ていたにもかかわらず、その当時の県下第2位の都市の存在を全く見過ごしてました。私自身がその程度であったので、今でも間違える人がいても「無理もねーや」と妙に納得してしまいます。

そのような富士吉田をもっと皆さんにも広く知ってもらいたいと常々思っています。これからもいろいろな富士吉田を紹介していきたいと思います。<FU>

## 富士吉田市歴史民俗博物館 FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY

### ご案内

開館時間 / 午前9:30～午後5:00 (午後4:30迄入館可)

休 館 日 / 火曜日(祝日を除く) 祝日の翌日(日曜

・祝日を除く) 12月28日～翌1月3日

観 覧 料 / 大 人 300円(団体 240円) 団体割引は  
小中高生 150円(団体 120円) 20名以上に適用

交通案内 / 中央自動車道河口湖I.Cより車で10分  
東富士五湖道路山中湖I.Cより車で10分  
富士急行線富士吉田駅より山中湖方面  
バス15分、サンパークふじ下車



タイトルの「MARUBI」は富士山から流れ出た溶岩台地一帯を指すこの地方のことは「丸尾」からとったもので、丸尾とは溶岩が流れる様子の「転び」が転化(変化)したものとされています。